

自ら古典に親しむ生徒の育成

－地域教材を手がかりとして－

岩崎千尋・富山敦史・若森達哉

(奈良教育大学附属中学校)

棚橋尚子

(奈良教育大学 国語教育講座(国語科教育))

Fostering students themselves familiar with classics
Regional teaching materials as clues

Chihiro IWASAKI, Atsushi TOMIYAMA, Tastuya WAKAMORI

(Junior high School attached to Nara University of Education)

Hisako TANAHASHI

(Japanese Language Education Nara University of Education)

要旨：伝統的な言語文化の育成は、平成20年の学習指導要領改訂以降、小学校においても全学年で取り組まれるようになったが、現行の学習指導要領に則った教育を受けてきた生徒の意識の中で「古典」は、まだまだ「親しむ」ものであるとは言い難い状況である。こういった生徒の実態に鑑み、中学校国語科において、生徒自らが進んで古典に親しめるような手立てを学ぶことができる地域教材を手がかりとした指導法を提案したい。

キーワード：伝統的な言語文化 Japanese linguistic culture
地域教材 regional teaching materials
学習指導要領 course of study

1. はじめに

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(平成20年1月17日)において、伝統や文化に関する教育の充実が提言された。この答申を受け、平成20年改訂の学習指導要領において、国語科の内容は3領域及び〔言語事項〕という構成から、3領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕という構成に改められ、古典教育はこの〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の中に位置付けられるようになった。この改訂に伴い、小学校においても全学年で古典に関わる内容が取り上げられるようになっていく。古典の指導における改善の基本方針として「生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する」ことが挙げられている。そのためには、教材として与えられる古典を学習させるだけでなく、自ら古典を学び親しんでいくための手立てを得させることが肝要である。また、そのためには資料を読み取る力、聞き取りをする力の育成にも同時に取り組んでいく必要がある。

2. 生徒の実態

平成28年度に入学してきた本校の中学1年生153名を対象に年度当初、国語の授業に関するアンケート¹⁾を実施した。そのアンケート項目の一つに、小学校での国語の授業を振り返り、印象に残っている教材について自由記述する項目を設けた。その項目で、古典に関する教材が印象に残っていると回答した生徒は、153名中14名であった。具体的な教材名としては、「竹取物語」「源氏物語」「枕草子」「平家物語」「小倉百人一首」が挙げられていた。また、授業で頑張りたいこととして、「古典に興味があるのでくわしく勉強したい」「中学では、特に古典を楽しみにしている」というような、古典学習に意欲的な生徒がいる一方で、「古典の勉強は中学から始まると聞いている」「小学校では古典学習が行われていなかった」と発言する生徒も少なくなかった。アンケートの結果として、彼らの意識の中で「古典」は、まだまだ「親しむ」ものであるとは言い難い存在であることがうかがえる。

こういった生徒の実態に鑑み、中学校においては、受け身的に古典を学習させるだけではなく、生徒自らが進んで主体的に古典に親しめる手立てを学ぶことができる

ような学習を進めていく必要があると考える。

3. 具体的実践について

今回の実践では、教科書の古典教材の学習から、地域に伝わる身近な古典にも生徒が触れていけるよう授業を構築した。授業を組み立てるにあたっては、教科書で扱われているものだけが「古典」なのではなく、「古典」は、生活している身近な地域の中にも存在するものであると生徒が実感できるようにすることを目標とした。

3. 1. 第1次（全2時間）

○第1時「小倉百人一首」

- ・小倉百人一首を用いて「坊主めぐり」をする。
- ・読み札の絵柄から気がついたことについて班で話し合う。
- ・決まり字かるたを行い、古典独特の表現に親しむ。

読み札の絵柄について、生徒からは、「男の人に比べて女の人は少ない」「女性の服装は華やかだけど、『法師』は地味な服装だ」「男の人で、名前に『院』『天皇』とつく人は絨毯のようなものの上に座っているけれど、女性で名前に『親王』『天皇』とつく人はカーテンのようなものの後ろに描かれている」というような気づきの声があがっていた。

決まり字とは、競技かるたの世界では一般的に使われるもので、そこまで読まれればその札だと確定できる部分を指す。今回は、「一字決まり」と呼ばれる7首、「二字決まり」と呼ばれる10首の札を用いた。該当の歌を以下に示す。なお、本実践で使用する「小倉百人一首」の表記は、今回の実践で使用した京都大石天狗堂製の百人一首「小倉山」の表記に従うが、決まり字を示すため歌の初句については一部表記を変更している。

〔一字決まり〕

- ・ さびしさに宿を立ち出て眺むればいづくも同じ秋の夕暮（良暹法師）
- ・ すみの江の岸による浪よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ（藤原敏行朝臣）
- ・ せを早み岩にせかるる瀧川のわれても末に逢はむとぞ思ふ（崇徳院）
- ・ ふくからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ（文屋康秀）
- ・ ほととぎす鳴きつる方を眺むればただ有明けの月ぞ残れる（後徳大寺左大臣）
- ・ むらさめの露もまだひぬ真木の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮（寂蓮法師）
- ・ めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな（紫式部）

〔二字決まり〕

- ・ うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとは祈

らぬものを（源俊頼朝臣）

- ・ うらみ侘びほさぬ袖だにあるものを恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ（相模）
- ・ しのぶれど色に出にけり我が恋はものや思ふと人の問ふまで（平兼盛）
- ・ しらつゆに風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける（文屋朝康）
- ・ つき見れば千々に物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど（大江千里）
- ・ つくばねの峯より落つるみなの川恋ぞつもりて淵となりぬる（陽成院）
- ・ ももしきや古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり（順徳院）
- ・ もろともにあはれと思へ山ざくら花よりほかに知る人もなし（大僧正行尊）
- ・ ゆふされば門田の稲葉おとづれてあしのまるやに秋風ぞ吹く（大納言経信）
- ・ ゆらの戸をわたる舟人楫をたえ行方もしらぬ恋の道かな（曾根好忠）

決まり字を生徒に示した上で、6人グループをつくり、取り札を各グループに配布して、かるたをとらせた。「小倉百人一首」に初めて触れる生徒もいたが、決まり字を予め示しておくことで、全員が遊び感覚で積極的に取り組むことができていた。

かるたをとる際、生徒が触れる取り札には、濁点のない歴史的仮名遣いで下の句が書かれているが、歌が読み上げられたときには濁点が補われ、歴史的仮名遣いで書かれている文字も現在の発音として発声される。取り札の古典独特の表記を見ながら、現在の発音として発声される音を聞くことを繰り返すことで、生徒は自然と現在の表記との違いを受容できるようになっていった。

今回の実践では、京都大石天狗堂製の百人一首「小倉山」を使用した。製品によって読み札の絵柄は異なるので、他製品の絵柄と比較して生徒に示すことも、教材提示の一つの方法として考えられるだろう。

○第2時「いろは歌」

- ・いろは歌の韻律（七五調）に気付く。
- ・現在では使われていない仮名（「ゐ」や「ゑ」など）があることに気づく。
- ・いろは歌は現在においても遊びの中や生活の中に存在していることを確認し、受け継がれているものであることを押さえる。

音読をくり返すことで、生徒はいろは歌の韻律（七五調）に気づき、「使ったことのない文字がある」と、既習のひらがなと照らし合わせることで、現在では使われていない仮名（「ゐ」や「ゑ」など）がいろは歌に使われていることにも気づくことができていた。また、『ん』が入っていない」という気づきの声もあがり、『ん』とい

う文字はいつから使われるようになったのか」と考えを巡らせている様子が見られた。このような気づきを掘り下げていくと、日本語音韻の歴史についても、生徒の興味を喚起することができるだろう。さらに、いろは歌が47字をそれぞれ一度だけ使い、かつ意味が通るように並べられていることを示すと、「すごい！」と感嘆の声をあげる生徒の様子が見られた。そして、『けいどろ』でも使う「アニメでも出てきていた」という一部生徒の気づきから、いろは歌は、現在においても遊びや生活の中に存在し、受け継がれているものであると理解できたようであった。

3. 2. 夏季休業中課題「地域に伝わる民話・伝説レポート（わたしたちの地域に伝わる古典）」作りを通して奈良県の寺社や地名の由来にまつわる伝承を提示し、いろは歌の他にも、もっと身近なところに、受け継がれている「古典」が存在するのだということを紹介した。その際、生徒に示した伝承の一つを以下に示す。

観世発祥の地「面塚」（奈良県磯城郡川西町）
 天から能面とねぎ一束が降ってくる夢を見た能楽師が、夢で見た場所へ行ってみると、そこには面とねぎ一束が落ちていた。その面を被り、練習を重ねた能楽師が後に将軍に認められた。

そして、自分たちが住んでいる地域にはどのような古典が存在するのか調べてみようと呼び、「地域に伝わる民話・伝説レポート」を夏季休業中の課題として生徒たちに課した。その際、書籍やインターネットのみで調べるのではなく、実際に現地を訪れて、地域の方々に「聞く」ことも調べる方法として有効であることを生徒に示した。

レポートに取り組むための手順例として、以下に生徒Aが実際に取り組んだ手順を示す。

(生徒A) レポート作成の手順

①テーマの決定
 習い事の関係で毎年訪れている、「菅原天満宮」について調べることに決める。

②インターネットによる調べ学習
 インターネットで、菅原天満宮について調べる。

③情報の整理
 調べたことから、わかったことや疑問点を整理する。

④現地での聞き取り
 整理しておいた疑問点を中心に、菅原天満宮の社務所で勤務されている方にインタビューを実施。

⑤レポート作成
 インターネットで調べたことやインタビューによりわかったことを整理して、レポートを作成。

このような手順を踏み、生徒Aは以下に示すようなレポートを書き上げた。

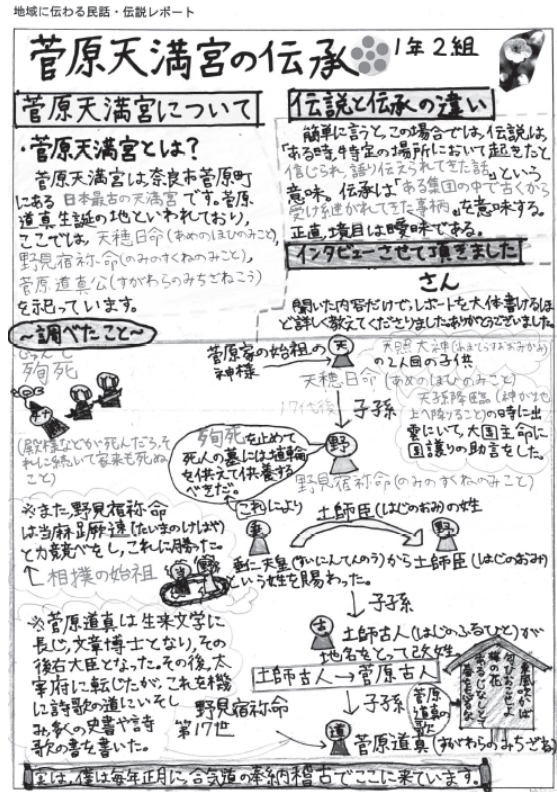


図1 「地域に伝わる民話・伝説レポート」

レポートを作成した生徒Aは以下のように感想を述べていた。

(生徒A) 感想
 天満宮で働く方にインタビューできたことで、今まで断片的に知っていた知識・聞いたことのあった知識が、つながっていったことがおもしろかった。また、新たに知ったことの中で、歴史について知れたのが特に興味深かった。菅原天満宮の歴史の中で、菅原道真という人物につながっていくまでの過程にいろいろなできごとがあったことを知れた。

ここまで生徒Aについて述べたが、課題を行った後、生徒から出てきた感想は、大きく分けて以下の4つに分類される。

- ・身近な地域について、より深く知ることができたことに対する喜び
 - ・身近な地域に、思わぬ伝説が存在していたことへの驚き
 - ・自らが生活する地域への関心の高まり
 - ・調べたもの以外の伝説・伝承への関心の高まり
- 他の生徒から出てきた感想の一部を以下に示す。

(生徒B)
 自分の身近に民話・伝説などないと思っていました。でも、実際には、たくさんの民話・伝説がありました。私は、今あるものには全てつながりがあるように思いました。

(生徒C)

今回、これを調べるにあたり、実際に猿沢池と采女神社に行ってみました。猿沢池は、僕の中では、幼少の頃より鯉にえさをあげるのを楽しみにしている場所でしたが、その猿沢池にこんな悲しい物語があったとは知らなかったです。采女祭りも名前は知っていましたが、実際に足を運んだことはありません。今年の采女祭りには足を運んでみようと思います。

(生徒D)

自分の地域を調べていくうちに、新たな発見があり、知っている場所でも伝説があるんだと驚きがありました。もっと地域のことについて知りたいな、とも思いました。そして、自分が住んでいる地域のことももっと知って色々な視点から見られるようになりたいです。

(生徒E)

今回、地元の伝説についてよく知れたし、新たなナゾもあるので地元の京田辺を改めてめぐって、地元の伝説を知っていききたいと思います。

(生徒F)

普段何とも気にせず通っている所が、実は昔に伝説があったりするので、今度は少し立ち止まって、何があったかを深く知りたいです。

3. 3. 第2次 (全10時間)

○第1時「月に思う」

光村図書1年の「月に思う」という教材を用いて、古典に描かれた月に対する当時の人々の考え方や感じ方をとらえさせた。教材本文中に出てくる「竹取物語」「徒然草」「小倉百人一首」に加えて、月の満ち欠けや月の見え方、季節などによって様々な月の呼び名が存在することや、「小倉百人一首」の中には教科書に取り上げられている和歌以外にも十数首の和歌が収められていることに触れ、古人が月に対して高い関心を寄せていたことを確認した。以下に授業の中で取り上げた歌を示す。

- ・天の原ふりさけ見れば春日なるみかさの山に出でし月かも (安部仲麿)
- ・今来むといひしばかりに長月の有明けの月を待ち出づるかな (素性法師)
- ・月見れば千々に物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど (大江千里)
- ・有明けのつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし (壬生忠岑)
- ・朝ぼらけ有明けの月と見るまでに吉野の里に降れる白雪 (坂上是則)
- ・夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいづこに月宿るらむ (清原深養父)
- ・廻り逢ひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな (紫式部)
- ・やすらはで寝なましものを小夜更けて傾くまでの月を見しか (赤染衛門)

・心にもあらで憂世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな (三条院)

・秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出づる月の影のさやけさ (左京大夫顕輔)

・ほととぎす鳴きつる方を眺むればただ有明けの月ぞ残れる (後徳大寺左大臣)

生徒は、「昔の人は、よく月を見ていたんだな」「月は、今も昔と変わらず美しいままなのに、最近の人は昔の人ほど月を見ていない気がする」というような感想を寄せていた。

第2時～第10時はワークシートを用いて、「竹取物語」を学習した。

○第2時

- ・絵本「かぐやひめ」から「竹取物語」のあらすじをつかむ。
- ・「竹取物語」の冒頭文を視写し、現代語訳と読み比べることで内容を理解する。

今回の実践では、いもようこ『かぐやひめ』(金の星社)を用いた。後の学習で絵本の「かぐやひめ」と「竹取物語」とを比較できるように、絵本の内容(登場人物・物語の展開)についてメモをとらせた。

○第3時

- ・翁と姫のかぐや姫への関わり方に着目し、翁がかぐや姫を人ならざるものであると認識していたことを理解する。
- ・かぐや姫の発言にある「深き心ざし」とはどのようなものを意味するのかについて話し合わせ、かぐや姫が自身の結婚相手に望んでいたことを読み取らせる。

翁がかぐや姫に対して「いつく(神聖なものに対して使われる表現)」という言葉や尊敬語を使っていることなどから、翁がかぐや姫を人ならざるものであると認識していたことを押さえさせた。

そして、かぐや姫の「深き心ざしを知らでは、婚ひがたしとなむ思ふ(『深き心ざし』を確かめずには結婚しがたいと思う)」という発言に着目し、かぐや姫が結婚相手に望んでいたことが何であるのかについて話し合わせた。その際、生徒からは「深き心ざし」について、「どれだけ自分のことを好きか」「自分のためにどこまで尽くしてくれるか」「自分のほしい物をくれるか」「嘘をつかず誠実であるか」「信頼できる人であるか」というような意見が出されていた。また、このような読み取りから、「かぐや姫の望んでいたことは、今の私たちが望みそうなことと同じなのかもしれない」と、かぐや姫と現代に生きる自分たちとの間に共通点を見出す生徒も見られた。

○第4時・第5時

- ・石作の皇子の話の内容と和歌の修辞法(掛詞)について理解する。

- ・くらしの皇子の話に登場する和歌の修辭法（縁語）について理解する。

第4時・第5時では、石作の皇子の「うみ山の道に心をつくし果てないしのはちの涙ながれけり」という歌と、くらしの皇子への返歌としてかぐや姫が詠んだ「まことかと聞きて見れば言の葉を飾れる玉の枝にぞありける」という歌を中心に、和歌の修辭法（掛詞・縁語）について理解する学習を行った。「竹取物語」に出てくる歌においては、「仏の御石の鉢」「蓬萊の玉の枝」などの具体物と登場人物の心情とが共に詠み込まれることが多い。そのため、ここで和歌の修辭法（掛詞・縁語）を理解しておくことによって、後に登場する歌の掛詞を言葉遊びのような感覚で読み解くことができるようになる。また、このような学習は生徒の語感を磨くことにもつながると考えられる。

○第6時

- ・くらしの皇子の話の展開を捉え、場面を想像しながら音読する。

ここではまず、話の展開を捉え、くらしの皇子の作り話の巧みさがどこにあるのかについて考えさせた。ここでは、「具体的な表現（「辰の刻」「二、三日ばかり、見歩くに」など）の多さ」「話の内容が詳しいこと」というような意見が生徒から出てきた。そして、それらを踏まえた上で、「かぐや姫や翁をだますために、くらしの皇子はどのように語ったのか」と問いかけ、音読の練習をさせた。はじめは古典独特の表現に戸惑い読みづらそうにしていたが、繰り返し音読をするうちに慣れていき、授業が終わる頃には、くらしの皇子さながらにすらすらと読むことができている生徒も見受けられるようになった。

○第7時

- ・他3人の貴公子の求婚譚の内容を理解する。
- 第7時では、他3人の貴公子（右大臣あべのみうし・大納言大伴の御行・中納言石上まるたり）の求婚譚の内容を、和歌と現代語訳とを中心に読み取らせた。そして、ここまでに登場した貴公子（石作の皇子・くらしの皇子）も含め、誰がかぐや姫の結婚相手としてふさわしいかについて考えさせた。生徒の意見はおおよそ2人の人物に絞られた。その人物を、以下に理由とともに示す。

右大臣あべのみうし（火鼠の皮衣）

- ・他の貴公子たちのように、かぐや姫を騙そうとしなかったから。
- ・お金をたくさん持っているから。

中納言石上まるたり（燕の子安貝）

- ・他の貴公子たちは、かぐや姫から言われたものを自分の力で手に入れようとしなかったが、中納言は自分で手に入れようと頑張ったから。
- ・唯一かぐや姫から先に歌を贈られた人だから。

○第8時

- ・帝との関わりの中で見られるかぐや姫の特異性と、か

- ぐや姫の帝に対する関わり方の変化について読み取る。

帝が無理やり宮中へ連れて行こうとすると、かぐや姫は自身の姿を見えなくしてしまう。その「きと影になりぬ」という表現に着目させ、かぐや姫の特異性を読み取らせた。そして、はじめは帝からの申し出を冷たく断っていたが、最後には帝と情のこもった手紙のやり取りをするようになるという、かぐや姫の変化についても読み取らせることで、「竹取物語」はかぐや姫の人間としての成長も描いているのだということを確認させることができた。

○第9時

- ・かぐや姫の昇天の場面を読み取る。

ここでは、「衣着せつる人は、心異になるなりと言ふ（羽衣を着せてしまった人は心が変わってしまうと言ふ）」「ふと天の羽衣うち着せ奉りつれば、翁をいとほし、愛しとおぼしつることも失せぬ（天人がさっと羽衣を着せてしまわれたので、かぐや姫は翁のことをかわいそうに、いたましくお思いになる気持ちが消えてしまった）」という表現を中心に、かぐや姫の変化について読み取らせた。また、この場面は、かぐや姫だけでなく翁や姫、帝の心情も多く描かれているので、そういった登場人物の心情も丁寧に押さえるよう心がけた。

○第10時

- ・「竹取物語」の一場面から、登場人物の心情を想像して短歌を詠む。

第10時では、ここまで読み進めてきた「竹取物語」の登場人物の中で、最も印象に残った人物について、心情を想像し短歌を作らせた。

3. 4. 第3次（全1時間）

○第1時 『竹取物語』ゆかりの地域

- ・「竹取物語」にゆかりがあると考えられている奈良県北葛城郡広陵町と京都府京田辺市について、「地域に伝わる民話・伝説レポート」をもとに紹介。
- ・「ゆかりがある」とされている根拠や、二つの地域の違いについて気づきの交流。

ここまでに学習した「竹取物語」にゆかりがあるとされている、奈良県北葛城郡広陵町と京都府京田辺市について、「地域に伝わる民話・伝説レポート」をもとに紹介し、「ゆかりがある」とされている根拠や、二つの地域の違いについて気づきの交流をさせた。奈良県北葛城郡広陵町と京都府京田辺市は、ともに本校生徒の通学区域である。本校には様々な地域から通っている生徒がいるので、生徒は自分が住んでいるそれぞれの地域と比較しながら意見交流ができていた。

4. 今後の課題と展望

今回の実践では、地域に伝わる民話や伝説を手がかりとして、古典に対する生徒の興味関心を喚起することができた。しかし、そういった民話や伝説を教材化するためにはまだまだ課題が残っている。

4. 1. 教材開発（地域「奈良」の探究）

今回の実践では、古典学習の導入として、生徒に地域に伝わる民話や伝説を触れさせるにとどまった。今後は、地域の民話や伝説を教材化し、既習の古典作品とのつながりを感じさせられるような指導法の開発に取り組みたい。そのためには、まず、生徒の興味・関心がどこにあるのかを見極めることが肝要である。その上で、地域に伝わる民話・伝説や、奈良で発生、あるいは奈良に主題を設定した古典作品などを取り上げ、学習を終えた生徒が自ら古典に親しんでいけるような素地を養いたい。

4. 2. 悲恋の乙女（試案）

4. 1. で述べたような教材開発を進めていくにあたり、采女伝説の教材化の可能性について述べる。

采女伝説とは、奈良県奈良市の猿沢池のほとりに建てられている采女神社にまつわる伝説である。概略を以下に示す。

采女伝説（概略）

昔、帝の寵愛を受けていた采女が、帝の心変わりを嘆き、猿沢池にその身を投げた。

亡くなった采女を悼み、猿沢池のほとりに社が建てられたのだが、采女は自らが身を投げた池を見るに忍びず、一夜のうちに社を後ろ向きにしまった。

この采女伝説は、「大和物語」や謡曲「采女」との関わりが非常に深く、さらに、福島県郡山市にも、奈良の采女伝説とは異なる采女の伝説が存在する。「大和物語」・謡曲「采女」・郡山市の采女伝説は、それぞれ語られ方が異なるので、それぞれを比較しながら提示し、「それらの違いが生まれたのはなぜか」という問いを生徒に投げかけることもできるだろう。采女伝説は、様々な作品を横断し、他の地域へもつながっていくことができる教材としての可能性を秘めているのである。

注

1) アンケート項目は以下の通りである。

【小学校での国語の授業について】

①国語の授業は「楽しい」と思いますか。
ア そう思う。 イ ややそう思う。
ウ あまりそう思わない。 エ そう思わない。

②①のように答えた理由や、これまで受けてきた国語の授業の感想を、できるだけ詳しく書いてください。

③国語の教材で印象に残っているのはどのような教材ですか。

【中学校での国語の授業について】

国語の授業への期待や希望、授業で頑張りたいことはどのようなことですか。

参考文献

- 中央教育審議会（2008）、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2009/05/12/1216828_1.pdf, 2016年11月2日
- 大村はま（1991）、『大村はま国語教室3』, 筑摩書房
- 乾健治（1981）、『子どものための続・大和の伝説』, 奈良新聞社
- 丸山顕徳（2010）、『奈良伝説探訪』, 三弥井書店
- 千田稔（2013）、『古事記の奈良大和路』, 東方出版
- いもとようこ（2008）、『かぐやひめ』, 金の星社
- 新編国歌大観編集委員会（1983・1992）、『新編国歌大観』, 角川書店
- 大井田晴彦（2012）、『竹取物語』, 笠間書院
- 角川書店編（1999）、『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 竹取物語（全）』, 角川書店
- 犬養廉ほか（1986）、『和歌大辞典』, 明治書院
- 久保田淳・馬場あき子（1999）、『歌ことば歌枕大辞典』, 角川書店